

## 第3回

## 第1章 人間としての生き方在り方の自覚

## 青年期の特徴と課題

## 今回学ぶこと

青年期とはどのような時期なのでしょう？ 今回は、心身ともに大きな変化を遂げる青年期の特徴について学びます。二次性徴、第二反抗期、自我の目覚め、個人化と社会化の過程からなるアイデンティティのあり方、そしてアイデンティティの獲得の過程の失敗に由来する、アイデンティティの拡散について、一緒に考えていきましょう。



講師

千田有紀

## ■ 青年期の多様な変化 ■

青年期は、人間にとって心身の大きな変化のときです。身長や体重が急激に増加することは、「青年期スパート」と呼ばれています。また一般的に男女が、それぞれの身体的な特徴を加速させていくことを、「二次性徴」といいます。

また教師や大人といった「権威」を拒否して、反抗を試みる「第二反抗期」が現れます。中学生のころが、身体的な変化に戸惑う時期だとすれば、高校生にとっては、むしろ自分の内面の精神世界に関心が向けられる時期かもしれません。親から心理的に独立していくことを「心理的離乳」といいます。

青年期は、親から精神的に独立し、友情や恋愛に準拠しつつ、社会的な関係のなかで生きていくための準備期でもあります。

## ■ ■ 自我の発見 ■ ■

ドイツの哲学者であり教育学者であるシュプレンガーは、「青年ほど、深い孤独のうちに、ふれあいと理解を渴望している人間はいない」といっています。理解してもらうために自分を開示することは傷つく機会ともなり得るからです。こうしたアンビバレントのなかで、孤独を感じるようになります。

青年期には、もっとさらに深く「自我」に気づきます。「自我」とは、辞書的に言えば、認知、思考、感情、意思、意識などの精神機能を統合する心の中枢機関です。青年期には「わたし」を改めて発見する、「自我の目覚め」が起こります。また「自分」を知るさまざまな「自我経験」を持っていきます。「自我経験」は、他人に対しての思いやりを持ったり、自分も他人もまたひとしくこの社会の一員なのだという意識を持ったりする契機となり得ます。

## ■ ■ 主体性の確立 ■ ■

自分というアイデンティティは、「エゴ・アイデンティティ」です。アイデンティティは外来語であり、「自認」や「性同一性」から「存在証明」まで、さまざまな訳語があります。

アイデンティティは、個人の側からいえば、「私は私である」という感覚、自己の内的な一貫性と連続性を保つことが必要です。臨床の現場などでは、「物語」として把握されることもあります。他方、私たちは社会の側からは、さまざまな役割を期待されています。自分のなかでの一貫性を固めていく「個性化」の過程と、社会に適応する「社会化」の過程がともに重要です。

アメリカの精神分析学者エリクソンは、アイデンティティの確立過程での大きなつまずきを、アイデンティティの拡散と呼びました。それには、意識の過剰、選択の回避と麻痺、対人距離の失調、時間的展望の拡散、勤勉さの拡散、否定的アイデンティティの選択などがあります。